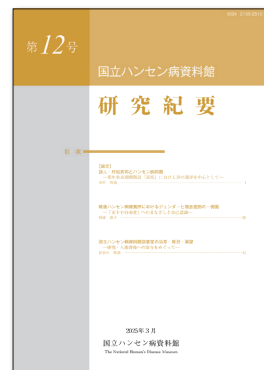


資料館だより

2025.4.1 No.126 (季刊)

編集・発行 国立ハンセン病資料館

『研究紀要』第12号のご案内



『国立ハンセン病資料館 研究紀要』第12号が3月末日付で発行されました。この紀要は、国立ハンセン病資料館、重監房資料館、社会交流会館等の職員が、事業にかかる調査・研究の成果を発表したり、論考を発表したりする目的で刊行しています。

第12号の内容は以下の通りです（掲載はあいうえお順）。

木村哲也「詩人・村松武司とハンセン病問題—栗生楽泉園機関誌『高原』詩の選評を中心として—」は、国立療養所栗生楽泉園の機関誌『高原』で長く詩の選者を務めた村松武司（1924-1993）が誌上に残した全314点の選評を検討し、療養所の外から園内の詩人たちとかかわり続けた実践と思索の意義を問うものです。本論では、村松の仕事の意義として、外国人や失明者らの詩に注目しハンセン病文学における多様性を見出したこと、ハンセン病問題の克服における「全体性の回復」の重要性を主張したこと、書き手固有の経験を掘り下げるにより普遍性を獲得しようとしたこと、などを指摘しています。詩の読者の安易な共感や一体感を退け、埋まることのない距離を見据えつつ、なお相互理解への道を模索した足跡をたどる労作です。

西浦直子「戦後ハンセン病療養所におけるジェンダーと複合差別の一側面—『女子不自由者』へのまなざしと自己認識—」は、療養所における複合差別、特に障がいとジェンダーの問題を取り上げます。化学療法の開発、社会復帰者の増加など、ハンセン病問題を取り巻く状況が大きく変化した1950年代以降、隔離政策は継続しつつ、療養所内では経済格差が進行し、弱い者がより弱い立場に置かれる状況が出現します。本論考ではこうした現象が顕著に現れた1960年代の国立療養所多磨全生園を舞台に、同時代の園内誌における記述のなかで、失明した男性、軽症の女性、失明した女性の三者の記述が異なる課題と目標を持っていた点に注目します。この検討から、私たちが「入所者」として一括りにすることで見えない存在にしてきた人びとの声を聴き、ハンセン病問題をより多角的な人権課題のなかに位置付けて考える試みです。

長谷川秋菜「国立ハンセン病資料館図書室の沿革・現況・展望—研究・人権啓発への寄与をめぐる—」では、当館図書室の成立と現状、今後の啓発への意義を考察しています。図書室の来歴と蔵書構成について俯瞰し、多磨全生園患者自治会図書室に起源をもつハンセン病問題の専門図書館としての歴史的意義に加え、それを維持しつつ、他の多様な人権問題に視野をひらく可能性を検討した意欲作です。また図書室としては初めて利用者アンケートに取り組み、その傾向から活動への示唆を読み取る試みも盛り込まれています。

今回掲載する論考は、ハンセン病問題を他の人権課題と重ね合わせようとする問題意識を共有し、患者、回復者の歴史とその遺産から、将来的にハンセン病問題が持つであろう意義を積極的にくみ取ろうとしています。外国人、障がい者、女性など、ハンセン病問題以外の人権問題から関心を持たれた方にも読みやすい内容になったかと思います。

なお、第11号までは印刷製本した『研究紀要』も製作・配布してきましたが、CO₂排出量削減に向けたペーパーレス促進や、支出のスリム化に向けた検討の結果、第12号についてはデジタルデータの配信（PDFファイルの公開）に切り替えることになりました。PDFデータは当館公式ホームページよりダウンロードできます。同じサイトからは、バックナンバーも含めて当館研究紀要のすべてのコンテンツをダウンロードできます。

また同じく第12号より、各論文冒頭に要旨（アブストラクト 日本語・英語）を添付しました。検索のしやすさを考慮し、各論考あたり10語前後のキーワードも付しています。

多くの方にご覧いただけましたら幸いです。（西浦直子）

閲覧・ダウンロードはこちら➡



ギャラリー展「桜を植えた人びと」を開催中！4月13日(日)まで

当館1階ギャラリーにて、多磨全生園の桜をテーマとした展示を開催中です。桜の名所として知られる多磨全生園の桜並木は、70年前に入所者がその手で植え、今日まで大切に守り育ててきたものです。桜の垣根で閉ざされていたこの地に植えられた桜は、やがて多くの人をよび地域との懸け橋になっていきました。

今や古木となった桜並木が伝える多磨全生園の歴史を多く

の人に知っていただき、桜とともに入所者の想いが次の世代へと受け継がれていくことを願って企画しました。本展では70年前の桜の苗木の姿や、並木道をつくる入所者の姿をとらえた貴重な写真をはじめ、桜並木の葉を釉薬^{ゆうやく}にして作られた陶器などの作品を一堂に集めて紹介しています。当館2階展望窓から眺める桜並木も必見です。この春は当館で、桜を植えた人びとに想いをめぐらせてみませんか？ぜひご来館ください。
(占部好子)



桜並木をつくる人びと(1955年)



詳細はこちら



横浜市役所アトリウムで開催！

館外展示「その壁の向こう側—写真が語るハンセン病問題の真実—」

館外展示セットのひとつ



このたび当館では、館外での普及啓発活動の推進を目的として、館外展示セットを作成しました。この展示セットはすでに2月8日(土)から3月9日(日)まで、プレ展示として館内で展示を行いました。4月17日(木)から29日(火・祝)まで、横浜市役所アトリウム1階展示スペースBにて館外での最初の展示を行います。

展示の内容は、かつて「壁の向こう側」であったハンセン病療養所と入所者の貴重な写真を撮影した趙根在^{チョウゴンジェ}の作品の中から8点の写真を選び、キャッチコピーとシンプルな説明(英語併記)を組み合わせ、象徴的なハンセン病問題の特徴(強制隔離、監禁室、断種・墮胎など)を伝えるものです。往来する方々を写真とキャッチコピーで惹きつけ、最初の一步としてハンセン病問題への関心を持ってもらうことをねらいとしており、洗練された訴求力のあるデザインを目指しました。写真が持つ力を邪魔しないよう説明文は目立たないように記載し、文字数もできるだけ少なくしました。

横浜市役所アトリウムは、2020年に竣工した横浜市役所新庁舎内に併設されている公共スペースで、外部の団体が展示やイベントで利用することができます。庁舎はJR桜木町駅から徒歩3分、みなとみらい線馬車道駅からは直結、さらには観光地であるみなとみらい地区からも徒歩圏内という好立地です。庁舎1階から3階までは飲食店やコンビニエンスストアなどの商業施設が入っており、これらのエリアは休日にも開放されています。そのため、庁舎内は市役所の職員と利用者だけではなく、観光客や商業施設の利用者なども行きかっています。そうした点で、館外展示の目的に照らして理想的な会場であり、多くの方の目にとまることが期待できます。会期中、横浜方面へお出かけの際にはぜひお立ち寄りください。

今後も、今回作成した展示セットを用いた展示を各地で開催し、普段は資料館に来館されないような方向けた普及啓発活動に力を入れていきたいと考えています。

(大高俊一郎)



展示イメージ

【会 期】 2025年4月17日(木)～4月29日(火・祝)

9時～21時(最終日は16時まで)

【会 場】 横浜市役所アトリウム 1階 展示スペースB

〒231-0005 横浜市中区本町5-50-10

【参観料】 無料

【主 催】 国立ハンセン病資料館 (担当) 事業部事業課

【後 援】 横浜市

詳細はこちら



常設展示解説のご案内

国立ハンセン病資料館では、ハンセン病問題をより多くの方々に知っていただくために、学芸員による展示室2の「スポット展示解説」を行っています。

展示室2は、かつて厳しい隔離政策がとられていた時代の、人間性を無視した療養所の実態を展示しています。

ハンセン病患者への人権侵害を、歴史の知識として終わらせるのではなく、差別解消に向けた実践とは何かを考えるときではないでしょうか。

この機会に国立ハンセン病資料館にお立ち寄りいただき、すべての人に等しく人権が保障される社会をつくっていくための学びを、ともに深めてみませんか？
(橋本賢一)



開催日のひとコマ

詳細はこちら



日程 2025年開催日（4月～6月）

4月5日(土)・4月13日(日)・4月20日(日)・5月3日(土・祝)・5月4日(日・祝)

5月24日(土)・6月8日(日)・6月29日(日) *各回とも13時30分開始、時間は30分程度。

*予約不要。参加を希望の方は、受付にて整理券をお受け取りの上、開始前に展示室1の前にご集合ください。

ハンセン病国賠訴訟を闘った2人の証言映像を公開

昨年12月に上野政行さん（星塚敬愛園入所者）、^{うえの まさゆき}上野正子さん（星塚敬愛園入所者）の証言映像を当館の常設展示室3「証言コーナー」に追加しました。

上野政行さん（2023年ご逝去）は1923年長崎県に生まれ、尋常小学校5年生の時に発病し1941年に星塚敬愛園に強制収容されます。戦後、自治会の草創期から役員として活動し、ハンセン病国賠訴訟の最初の原告となりました。証言映像では無癩県運動や家族に対しての偏見・差別について語っています。



上野政行さん



上野正子さん

上野正子さんは1927年沖縄県の石垣島に生まれ、1940年星塚敬愛園に入所しました。1946年に結婚しますが、夫の清さんが断種手術を受けていたことに衝撃を受け、ハンセン病国賠訴訟の最初の原告となります。講演活動を精力的に行い、現在も星塚敬愛園入所者自治会の役員を務めています。証言映像では療養所での結婚・優生手術と厳しかった裁判闘争について語っています。

ハンセン病国賠訴訟では原告側が勝訴しました。判決では隔離政策における国の責任が認められると共に、国の政策によって患者・回復者への偏見・差別が助長されたことも示されました。ハンセン病問題は社会にいる私たち自身の問題であるという視点から、おふたりの証言をぜひご視聴ください。
(田代学)

4月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5 解
6	7 休	8	9	10	11	12
13 解	14 休	15	16	17 休	18	19
20 解	21 休	22	23	24	25	26
27	28 休	29	30 休			

5月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3 解
4 解	5	6	7 休	8	9	10
11	12 休	13	14	15 休	16	17
18	19 休	20	21	22	23	24 解
25	26 休	27	28	29	30	31

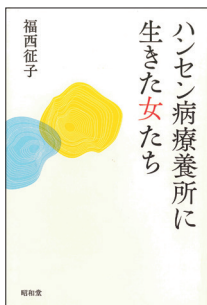
6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2 休	3	4	5	6	7
8 解	9 休	10	11	12	13	14
15	16 休	17	18	19 休	20	21
22	23 休	24	25	26	27	28
29 解	30 休					

休：休館日 休：図書室休室日 解：常設展示解説

：ギャラリー展「桜を植えた人びと」開催

：館外展示「その壁の向こう側—写真が語るハンセン病問題の真実—」開催



図書室より

今回ご紹介するのは、福西征子『ハンセン病療養所に生きた女たち』（昭和堂、2016年）です。国立療養所松丘保養園（青森県）で療養生活をおくる5人の女性回復者の証言を集めた本です。生い立ちから発症・入所に至るまでの経緯、療養所での結婚生活、夫の断種、患者作業、進学、断念、信仰、社会復帰や再入所、権利獲得運動への気後れなど、聞き取りによる率直な表現から、それぞれの人生経験を知ることができます。

解説では、同園の園長を務めた女性医師である著者が、ハンセン病療養所の女性に特有な人権問題について、具体的なデータを元に検討しています。今まであまりかえりみられてこなかったハンセン病療養所のジェンダーギャップに光を当てた、意義深い論考です。

ハンセン病療養所に暮らす女性の証言を集めた図書としては他に、佐々木雅子『ひいらぎの垣根をこえて ハンセン病療養所の女たち』（明石書店、2003年）があります。いずれも図書室で閲覧・貸出が可能です。ミュージアムトーク2024「ハンセン病療養所の女性たち—1冊の本をめぐる」のアーカイブ動画とあわせて、是非ご利用ください。（長谷川秋菜）

ミュージアムトーク2024 特集「ハンセン病療養所の女性たち—1冊の本をめぐる」 開催報告とアーカイブ動画公開のお知らせ

2024年度のミュージアムトークは無事に終了いたしました。ご参加いただいた皆さま、誠にありがとうございます。本講座の記録は全編字幕付きで当館のYouTubeチャンネルで公開しています。以下の開催報告とあわせてぜひご覧ください。



アーカイブ
動画はこちら

「いのちの痕跡を残す—津田せつ子『曼珠沙華』」（講師：西浦直子、当館学芸員）では、津田せつ子の婦人会での活動、園内の少女舎の寮母としての経験、また津田が担った・担わされたケア（看護／こどもの養育）の意義を検討しました。

「闘った女性の本と証言—上野正子『人間回復の瞬間』」（講師：田代学、当館学芸員）では、ハンセン病国賠訴訟で最初の原告になった上野正子の経験を、証言映像と著作を見ながら解説しました。

「内側から広がる言葉—塔和子『記憶の川で』」（講師：長谷川秋菜、当館図書室司書）では、塔和子の詩をルッキズムや生殖の観点で読み直し、抑圧された女性の経験から生まれた彼女の表現の意義を考察しました。



第4回講座「内側から広がる言葉—塔和子『記憶の川で』」の様子

「再起する女性像—藤本とし『地面の底がぬけたんです』」（講師：吉國元、当館学芸員）では、女性の間におけるケアのありようを明らかにし、失明してもなお口述筆記などで書き続けた藤本の執筆活動の意義を考察しました。

今回、各1冊の本を取り上げたのは、まずは女性たち自身の言葉を読むことから、ハンセン病問題における彼女たちの経験について理解を深めたいという目的があったからです。アーカイブ動画の視聴とともにそれぞれの本を当館の図書室でお手にとっていただけたら幸いです。（吉國元）

お知らせ 現在、「資料館だより」を、デジタル版を主とする形へ移行することを検討しています。読者のみなさまからの移行についてのご意見を募集しています。ご意見は下記連絡先まで（お電話等は、「国立ハンセン病資料館広報」宛でいただけますと幸いです）。

国立ハンセン病資料館 利用案内

■開館時間 9：30～16：30

■入 館 無料

■休 館 日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始、国民の祝日の翌日、館内整理日

■交 通 ・西武池袋線 清瀬駅南口より 西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分（「ハンセン病資料館」下車）
・西武新宿線 久米川駅北口より 西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分（「ハンセン病資料館」下車）
・JR武蔵野線 新秋津駅より 徒歩約20分



〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13 TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981 URL <https://www.nhdm.jp/>